

少人数指導における諸課題

重松 靖

(東京都国分寺市立第二中学校)

はじめに

「ゆとりのある教育活動を展開する中で、基礎・基本の確実な定着を図り、個性を生かす教育を充実すること」を基本方針の1つとして学習指導要領が改訂され2年目を迎えた。

また、文部科学省は、生徒一人ひとりのよさや可能性を伸ばし、個性を生かす教育の一層の充実を図るため、少人数指導や習熟度別指導を行うことを可能とする第7次教職員定数改善計画を平成13年度から推進し、きめ細かな指導の実現を進めている。

東京都においては、平成14年度、何らかの形で少人数授業等、きめ細やかな指導を実施している中学校は652校中543校あり、さらに必修教科において習熟度の程度に応じた指導を実施している学校は320校にのぼる。また文科省の調べでは、本年度、必修教科の授業において習熟の程度に応じた指導を実施している中学校は67%であるという。しかし、指導体制や指導方法については、各学校によって異なり、それぞれが試行錯誤を繰り返しながら実践しているのが現状である。

各学校が抱えている問題

多くの学校が抱えている問題点は次のようにまとめることができる。

1 教材の不足

習熟の程度に応じた小集団ごとの教材が開発されていないため、個に応じた指導を充実することができない。

2 打ち合わせ時間の不足

学習進度や評価を一致させるために、教師間の打ち合わせの時間が増加し、教師は多忙になっている。

3 時間割編成が困難

2～3人の教師が同じ時間に指導をすることになるので、時間割を組むのが大変である。特に非常勤講師が入る場合には時間が限定されるため他の教師への負担が大きくなることがある。

4 教室や教材・教具の不足

CDやピクチャーカード等の補助教材を複数用意しなければならない。また、規模の大きな学校では余裕教室や机、椅子が不足し、悪条件の中で学習しなければならないことも多い。

5 生活指導上の問題

教師の意図どおりの学習集団が編成できず、コースによっては、学習意欲の低い生徒が多く集まり、1時間の授業が生活指導に追われてしまう。

問題克服のために

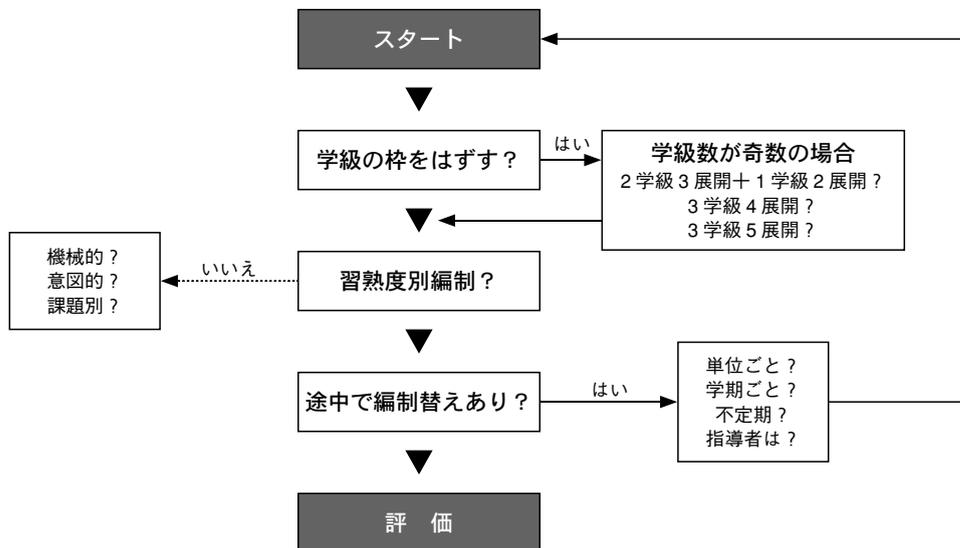
1 目的に応じた学習集団の編成

学習集団の編成は一般的に次ページの図のようにまとめることができる。

大切なことは、目的に応じた柔軟な編成をすることではないだろうか。英語の場合、習熟度別指導が常によいとは言いがたい。教師と生徒とのinteractionを通して新出事項を導入するときには英語の得意な生徒の力が大きな助けにはなるが、英語は苦手でも明るく活発な生徒がコミュニケーション活動を盛り上げてくれることも多い。さまざまなレベルの生徒が混在することにも意義があるのである。

なお、習熟の程度に応じたクラス編成をする場合には、ペーパーテストでの文法や言語に関する知識理解だけでコース分けをすべきではない。例えば、NEW CROWNのLET'S TALKのようにspeaking主体の単元では、話そうという意欲や発音、創意工

(図)



夫など、総合的な speaking の力に応じて学習集団を編制することがあってもよい。

大切なことは、年間指導計画をしっかりと立て、それぞれの単元において生徒にどのような力を付けさせたいのか、そのためにはどのような学習集団を編制するのが最も効果的なのかを十分に吟味し、生徒に対するガイダンスを強化することだろう。

2 指導方法の工夫

人数が少なければ効果があると短絡的に考えてはいけない。確かに、生徒一人ひとりに目が行き届き、英語の発話量も増えることは事実であるが、機械的なドリルを繰り返すだけでは、実践的なコミュニケーション能力を身に付けることはできない。40人近いクラスではなかなかできなかった指導方法を積極的に取り入れることが大きな効果を生むはずである。例えば、場面を重視したロールプレイングやスキット、dialogue を narrative に書き換える writing、聞いた内容を実際に行動させてみたり、自分のことばで言い換え、他の生徒に伝える活動等々、これまで一人ひとりに十分な時間がかけられないために敬遠していた活動を積極的に導入したい。

学習形態にも工夫が必要である。ある学校では、常に生徒が黒板に向かって座るのではなく、指導内容に応じて椅子を向かい合わせにしたり、全体を円形や半円形にするなどして生徒の心理的圧迫感を和

らげ、interaction の量を増やすという実践をしている。

基礎コースでは主に日本語を使って指導し、応用・発展コースではできるだけ英語を使う、ということによって使用言語を変えることもできる。

個に応じた指導とは、指導形態、教材、指導方法を工夫することによって初めて効果をあげるということを忘れてはならない。

3 指導内容の工夫

授業の主たる教材は教科書であるが、どこまで指導するのかによってハードルの高さは違ってくる。

例えば、基礎コースでは listening, speaking を中心に基本文の理解と簡単な自己表現ができ、本文の概要をつかむことができるようにし、発展・応用コースは、例えば、speaking ではさまざまな場面を想定しそれぞれの場面にふさわしい表現をさせてみたり、新出語彙についても他の用法にまで触れたりするなど、生徒の実態に応じて発展的内容にまで触れるようにする。

基礎コースでは、主に音声重視した活動を展開し、reading や writing 等文字を介する活動は必要最小限にとどめ、生徒達に自信を持たせ、学習意欲を喚起させるようにしたい。

4 評価について

評価は学習指導要領の目標と内容及び指導要録の

観点別学習状況を基に行うものである。したがって、習熟の程度に応じた指導においても評価規準は同じでなければならない。

例えば、「will を使って夏休みの予定を言うことができる」という評価規準を設定したならば、どのコースにいても、多少の誤りはあっても、will を用いて夏休みの予定を言うことができ、意味が理解できるものであれば「B」と評価すべきであるし、英語の質が高く、情報量も多いと判断すれば「A」と評価する。

また、「本文の概要を読み取ることができる」という評価規準であれば、基礎コースでは日本語、発展コースでは主に英語を使って理解度を確認しようとも、規準を満たしていれば「B」以上と判断すべきであるし、行間までしっかり読み取れていると判断できれば「A」と評価することもあるだろう。

発展的な学習をすれば「A」、しなければ「B」と判断すべきではない。

言うまでもなく、指導と評価は一体でなくてはならない。指導していないものは評価できないし、指導したものは正しく評価しなければならない。これまで speaking の評価は人数が多すぎるとか、評価が主観的になりがちであるといった理由で敬遠されがちであったが、1クラス当たりの人数が少なく、絶対評価が導入された今、speaking の評価を積極的に取り入れるべきである。

教師と生徒(個人 or グループ)とのインタビュー・テストや、小型のテープレコーダーを生徒に持たせ教師の質問や指示にしたがって英語を録音させ、後で評価するといったこともできる。また、評価規準を「意欲・態度」「意味が通じたか」などのように限定すれば生徒同士の相互評価をしてもよい。

授業中に使用したワークシートや作文だけでなく、録音したテープやビデオテープ、実際に読んだ英文などいろいろなものをファイルするポートフォリオ評価の手法を生かし、生徒個々の学習の成果がわかるようにして、学習意欲を高める工夫もしたい。

5 指導者について

習熟の程度に応じてクラス編制をする場合、最も手がかかるのはやはり基礎コースであろう。当該学

年所属だからという理由だけで、あまり経験のない教師が基礎コースを担当し、指導に苦慮するという話を聞く。基礎コースは、生徒の興味・関心を大切にしながらも、class management がしっかりできる経験豊かな教師が担当すべきだろう。

また、speaking の指導は得意だが writing の指導には自信がないなど教師には得意・不得意がある場合がある。それぞれのコースの内容に応じて最もふさわしい教師が指導に当たるようにしたい。

所属する学年全員の生徒を指導することができず、生活指導上支障があるという話も聞く。そういう意味からも、コースを固定せず、流動的なクラス編制をすることが大切ではないだろうか。

6 教材・教具の工夫

ピクチャーカードや CD などは、コースによって指導過程を変え、融通し合ったり、デジタルカメラを利用してピクチャーカードをモニターで投映するなどの工夫ができる。生徒や外国人講師の協力を得て、自作の音声教材やピクチャーカードを制作するのも楽しい試みだろう。

それぞれの教師が作成したワークシート等は是非ファイルして学校の共有財産として残したい。長期休業中にお互いに意見交換をしながらよりよいものを作り上げ、学校独自の活動例集を作ることはいらないだろうか。

おわりに

東京都教育委員会が平成 14 年に実施したアンケートでは、小・中学生の保護者の 85%以上が習熟度別授業を「よい(「どちらかと言えばよい」を含む)」と回答しており、生徒の 75%以上が「勉強がわかるようになった(「どちらかと言えばそう思う」を含む)」と答えている。

「打ち合わせの時間が取れない」、「時間割を組むのが大変」、「教材・教具の用意ができない」等々、解決すべき問題が多いのは事実だが、期待が大きく、効果があるのも事実である。1つのパターンにとらわれることなく、各学校の実情にあった少人数指導を実践していくことが大切である。